

カフカの「死刑宣告」に就いて

藤 川 晴 男*

(昭和40年10月30日受理)

1913年1月、「死刑宣告」を „Arkadia 年鑑“ (プロート発行) に発表した Kafka は、その校正に際し、11日付日記の冒頭で次のように自己批評をしている。

—die Geschichte ist wie eine regelrechte Geburt mit Schmutz und Schleim bedeckt aus mir herausgekommen und nur ich habe die Hand, die bis zum Körper dringen kann und Lust dazu hat: ……

Kafka にとってこの「死刑宣告」という短篇は、おりもの^{おりのもの}と粘液をつけて彼の胎内から生れてきた正式の分身であり生誕だつたわけである。創作という分娩作用を、8時間の強烈な陣痛に耐えぬき果したのである。それ故、手をさし伸ばせば、生れてきたものの肉体のすみずみまで触れてみることも出来るし、分け入つてみたいという彼の気持もうなずける。Kafka は冷徹な自己批評家であつたといわねばならぬ。

この作品は Kafka の創作方法の上に新しい転機を画した境界標石と考えられているが、詳しくは次の機会に比較検討を改めて試みてみたいと思う。今回は、云わばこの作品成立の背景史と考えると差支えないと思われる一人の女性—— Felice Bauer との奇妙な出会いに就いて触れ、作品にはどの様に定着したか、現実の素材と作品成立との paradox な関係を考えてみたい。いやむしろこういつた方が適していよう——F. B. という一女性との現実の危機を、Kafka がどのように受けとめたか、その間の事情を追いつめてゆくと、その摩擦する紙の下から、鮮明な画像が贅肉を切り落した Kafka の小説的モチーフの核をつけて、逆光に照らし出され、浮き上つてくるように思うのである。

1912年8月13日、Franz Kafka は Felice Bauer と Max Brod の家で逢つた。彼女が椅子に腰を下ろすと、まるで女中のように一瞬 Kafka は思うのである。このベルリン娘は骨ばつた顔に虚ろな目をのぞかせ、顎がぬけ出て長かつた。塗りたくつたような色目のよくないブラウス。鼻梁が曲つておしつぶれたようだ。髪はブロンドだが、硬く魅力もない。顎が張つている。

— als ich saß, hatte ich schon ein unerschütterliches Urteil.

彼が坐つた瞬間に、彼の心の中にはぬきさしならない意見 (宣告, 判決) が頭を占める。生来敏感でこまやかな Kafka とは、凡そ対蹠的な相貌と性格の出現に Kafka はただならぬショックをうけたのである。それから1ヶ月後の9月22日夜から翌朝にかけて一気に書かれた „Das Urteil“ の中で、Kafka は主人公 Georg Bendemann の婚約者を Frieda Brandenfeld と姓名の各イニシャルに意識的に冠したのである。ご丁寧にも Kafka は、本論稿発端の日記末尾に注して、更に Brandenfeld の Branden は Berlin の Brandenburg 門を想定したとことわつてさえいるのである。言うまでもなく現代東

* 外国語教室, 講師

西ドイツベルリン境界線のシンボル—— Brandenburg 門。東西陣営の冷酷な不安の接点に建っているこの門の名を、ベルリン出身故に偶然問題の女性の姓に寓意化した Kafka が、もしも生きていたならば、はたして何と思うか想像してみるだけだ。歴史の皮肉といつて笑いすませない気にもなるのではあるが……。

9月23日、Kafka は日記に書きとどめた。

›Diese Geschichte ‹Das Urteil› habe ich in der Nacht vom 22. bis 23. von zehn Uhr abends bis sechs Uhr früh in einem Zug geschrieben. …… Die bestätigte Überzeugung, daß ich mich mit meinem Romanschreiben in schändlichen Niederungen des Schreibens befinde. Nur so kann geschrieben werden, nur in einem solchen Zusammenhang, mit solcher vollständigen Öffnung des Leibes und der Seele. ……

Kafka は、こま切れな時間の不完全さのなかでは、「少しづつ」書くことなど出来もしないし、又承知もしなかつた。まさしくこのことを、この22日の夜が彼にはつきり示したのである。彼は一気に書きあげたあと彼を導いてものを書かせるあの限界のない運動を、豊かなかたちではつきりととらえる。——「書くとは、ただこのようにしてのみ、肉体と魂とのこれほども完全な開放によつてのみ、はじめて可能なのだ」と。彼は高揚したインスピレーションの到来を噛みしめながら、この小説を親しい人々に読みきかせる。そしてこの朗読が彼の信念を固める。「僕は眼に涙をためていた。物語の、疑いを容れぬ性格が確証された」。 (9月25日付日記) 更に10月6日には、親友 Brod に読みきかせた、この "Das Urteil" 及び „Heizer“ (>Amerika< の第1章) をも同時に。

書いたばかりの作品を友人たちや、妹たちに、更には父親(!)にまでも読みきかせたがるくせを彼はもっていた。これは——彼自身はそうだと言つて責めてはいるが (1912年1月4日付日記)—— 文学的な虚栄心からではない。自分の作品に肉体的に身を押しつけたいという欲求の現われだつた。Kafka は、朗読家としての天稟をもつており、作り出された音声的空間の中に作品をくり拡げることで、逆に作品の方から高められ、自分が引きずつてゆかれることを欲したのである。

Brod はこの朗読を聞き、特に「死刑宣告」の異状なモーフから察したのであろう、彼が自殺を企んでいることで Kafka の母親と意見を一つにする。それは Kafka が労働者傷害保険協会の公務以外に、小間物卸商の業務に従事する父の手助けをしなければならなくなつたため、書きたいことを脅迫的にさまたげるという理由からである。時間——こま切れでない時間がほしい。なのに父の仕事の義務までも加つて絶望的だ。そうした時間と、肉体的な力と、孤独と、沈黙とが足りなくなつてきたからだ。それとは逆に、彼の頭をとらえて離れぬ奇体玄妙な宇宙世界が益々脹れあがつてきて、崩壊の危機に瀕しているのではないのかと Brod が危ぶんだのも無理はない。

10月28日、Brod は日記に記入し、—— Franz は22頁にわたる長文の手紙を F. B. 嬢に書き、将来の不安を気づかつて心揺らいでいる、と書きしるす。

11月3日、Kafka は Max Brod と Oskar Baum (プラークの盲目詩人) に、>Amerika< の第二章を例により朗読して聞かせた。次いで Brod は、Kafka が F. 嬢にすつかり夢中で、「幸福」である旨報告している。この „Das Urteil“ の中で、Georg が Petersburg に住む友人宛の書簡で、Frieda Brandenfeld との婚約の喜びを告げる個所を思い起さ

せる言葉である。彼は当初、Felice Bauer との交際をきつぱり断たうとして、文通をお互やめようと提唱する。然し書くことによつて彼女を不幸におとし入れる危惧の念に駆られながら、彼はどうすることも出来ない。

11月24日になると、Kafka は中篇 „Verwandlung“ を Brod と Baum の前に朗読に及ぶ。1912年（大正元年）はかくの如く多産であつて、この作家の生涯にとつて重要な意味をもつ年になるのである。Felice Bauer との出会いがその契機になり、火に油を注いだといわねばならぬ。

Felice Bauer とは二度婚約し、二度とも婚約を解消した。その間 Kafka の心の中で烈しい良心の葛藤が吹きすさんだのである。29才という年令が青春から放逐された、一人前の男への入場切符を欲する焦躁未定の時期であり、若い Kafka にとつてそれは絶望により、局限されたある頂点に立つていた年だつたといえるかも知れぬ。結婚したいという喜びと驚愕と逡巡との間を烈しく動揺した、この29才の彼に特徴的な激変感情が、その後ずつと F.B. 嬢との間に続くのである。即ち「結婚」のイメージが Kafka の心の入口に佇むと、すぐそれは「独身」のイメージと縫れ合い、破局的な軋轢を生むのであつた。「僕はいつも進んで彼女に確約したが、幾度となく絶望的に彼女を愛したが、結婚以外に追求するねうちのある企てはなかつたのだが、にも拘らず僕はどうしても Felice と結婚出来なかつたのだ」と、8年後（1920年）再び恋に陥つた Milena という女性に Kafka はしみじみ述懐しているのである。

何故こうまでして結婚出来なかつたのか、という疑問が当然起つてくる。当時彼を悩ましたのは、世間一般に行われている結婚制度ではなく、自分以外の生の人間に対し現実世界で引きうけねばならなくなる責任の重さにあつた。彼が Felice Bauer に与えた上述の確約は、疑惑——そう、彼自身に巣くう不決断の虫によつて食い破られてしまうのだ。彼がはじめて彼女に逢つた瞬間、電光のように彼の頭を掠めすぎざる判決をもつても、気心の分らぬ一女性をとらえることは遂に彼には不可能だつた。これこそ文字通り、Kafka が自らに下した宣告——“ein Urteil”——だつたわけである。

かくして、彼女の現象世界に専ら向いていた外の目が、次第に、否、急激に彼の内部世界へ下降し細かにつき刺さりはじめたのである。と同時に、彼は自分自身の可能性を探求し、自らの希望と不安の数々を手探りしてみた末、己れ自身に一つの決定的判決を強請せざるを得ない状況を追い駆けている自分に気付く。彼は自分自身と、結婚に（つまり人生に）相反する排他的要求を課し与えて両方から切りさかれ、この決断を果し得ない。当然というべきだが、この結婚に関する paradox な考えは、Kafka の矛盾した彼独特の思考方法のなかの一面（それは多面球体でできている）をのぞかせているに過ぎない。

さて、この若者にとつての孤独は、彼の予備条件ともいふべき不可欠なもの（sine qua non）で、この作家のレーゾン・デートルの symbol といつてよい。書くためにもつと多くの時間がほしいと絶えず Kafka は内心訴えつづけた。そのために Kafka には、この世がもつと少いことも同時に必要になるのである。この世とは、第1に彼の家庭であり、彼はやつとの思いで束縛（特に父親の）に耐えながら、決して解放を味えない。次いで問題の許婚者——F.B. だ。そしてこの間を潜りぬけ彼の本質的な欲求とし

てここから派生してくるものに、人間はこの世においてその運命を実現し、よき生活を営んで家庭と子供とを持ち、連帯的社會の一員とならねばならぬ、という掟が顔を絶えずのぞかせるわけである。

Kafka の人生体験(就中この F. B. との関係)は文学上のお手本に結びついて反省の材料を提供する。Franz Grillparzer と Katharina Fröhlich との長い間の婚約、それからあのデンマークの実存哲学者 Søren Kierkegaard と Regina Ölsen との婚約解消。この二つは Kafka と Felice Bauer との仲を歪みなく照らす鏡の役割を果したといえるようである。が、Flaubert の姪 Caroline Commanville が後年〈想出〉の中に引用した Flaubert の言葉は、特に Kafka に深い感銘を与え、屢々 Brod に引用したといわれている。—— Flaubert が Caroline と慣例になつた散歩の途中、ある日 Caroline の女友達の家に二人は立ち寄り、と女友達は沢山の無邪気な幸福そうな子供にとりまかされている。帰る道すがら、Flaubert は姪に一言ぼつりと次のようにいうのだ。——*Il y a dans le vrai* (彼等は本当の生活をしている)。日常あたり前の生活の楽しみをすべて文学に捧げている自分の生活態度は間違っているのではないか、という Flaubert の自己判断。Kafka は到達不可能な純粋という「独身」の夢を夢見ながら、同時に独身はこの人生に於ける底なしの誤謬かも知れぬという疑いにとりつかれていたのであった。

彼はロシアの修道僧のような苦行を自らに課してゆく。そして彼は飽くことなく次第につのる緊張の只中で、「僕の結婚によつてのプラスの条件とマイナスの条件の一切」(1913年7月21日付日記)を吟味するのである。その際彼は常に「私の唯一の熱望、私の唯一の使命は……文学です(1913年8月21日、F. B. の父へ宛てた手紙の下書)。僕がこれまでにやりとげた一切は、孤独の結果に他ならぬ。結婚によつて、他と結びつき他に流される時はもう決してひとりではないのだ。……それだけはおめでとう、それだけはおめでとう(1913年7月21日付日記)」という要求にぶつかるのだ。

Kafka の禁欲と、創作力のこうした留保条件、及びそれと共に幸福な夫と父となる「あたり前の」生活への熱望と欲求はあい重なり合い、Felice Bauer とのあの出会いに於て烈しい軋轢に陥つたのである。この様な軋轢は、書く趣味が身うちに目覚めたすべての若者に共通な、ある種の名状し難い心理状況と似かよつてはいないであろうか。つまり、創作過程には胎内から産み出される生みの作用に通ずる何かがある故に、Kafka のように孤独な資質の作家には応々にして正式結婚を拒否する方向に動きがちで、少くとも独自のモーフと文体を捉え得るまでは独身でありたいという要請を自らに下してかかるだろう。従つて極めて古典的な Dilemma だつたわけであるが、Kafka の場合異例とすべきは、結婚か解消か、この二つの道の両側を激しく揺れ動きながら、一人の女性の間を5年以上の長期間、緊張と絶望と喜びの顔をつけて歩き続けたということであるだろう。この事実は彼がその間自己に下した宣告が何であれ、深い本質的な Paradox に根ざす自己矛盾から脱し得られなかつた証拠とみて差支えあるまい。ここで注意すべき確証を附記しておく必要があるのではないか。即ち、Felice Bauer との奇妙な関係は、彼が肺結核と診断される1917年末まで持続するのだが、この間に1914年か1915年に生れ、1921年ミュンヘンで死んだ一人の私生児が Kafka にあつた事実を、Brod は驚愕しつつ伝えていることを。ともかく、Kierkegaard の場合とかなりの共通点が見られ

るといわれる Felice Bauer との葛藤を経て、Kafka の宗教的文学的思想は、この不幸な事件を核に深化展開したとだけはいえよう。

「死刑宣告」のなかで父にも友人にもやさしい思いやりを示す Georg は、このように登場してきた一女性の前でもはや naiv な純粋さを維持できなくなつた Kafka その人になる。Felice Bauer との出会いのショックは、ほとんど予期されず彼の心に襲いかかつたのである。主体性の崩壊過程は急速に彼の内部を蝕みはじめるのである。彼自身さえ分らない坩堝の中に投げ込まれながら、このショックの重みに耐えながら Kafka は、彼の疑惑と不安を形象に仮託して醗酵の日を待ち尽くしたのである。彼がはじめて Felice Bauer に出会つた時、彼が „Urteil“ と日記に書きとどめた言葉をタイトルに、Kafka は自己の告発にとりかかる。それは震憾を伴い、冷血に黄色い血を己れの額に流して彼の心臓を貫く。最初から「父のあやまちのために」この世の外に投げだされてある孤独を強いられていた彼が（従つて Kafka は出生の当初からこの世に存在していないという考をもつ）、この自己告発のなかで予期しなかつた作家としての創作力を発見する。若い Kafka は、 „Das Urteil“ の結末を書き、

— In diesem Augenblick ging über die Brücke ein geradezu unendlicher Verkehr.

書き終つてペンをおいた瞬間、彼は確かな手答を身うち深く感得し、ずつしり重く胸元にだきしめたのである。自己分裂して崩壊一步手前の自己を、作品のなかに糾合し呼びもどすのに成功する。Kafka は誕生の喜びを日記に直ちに書きとどめた。この夜は、「どんなことでも表現され得るように思われ、どんなことに対しても、この上なく異様な諸観念に対しても、それらが燃え落ち消え去る或る巨大な火がととのえられているような」地点へ彼を近づけたのである。

さて、当小説のなかで父親を腕にかかえてベッドに運びながら、Georg は父が彼の胸のなかで時計の鎖をおもちやにしているのに気づき、名状し難い恐怖感におそわれる理解しにくい場面がある。これは私にスペインの画家、Salvador Dali (1904~) の「柔らかな時計」(1931年) を素朴なかたちで思わせる。

「記憶の固執性ほど楽しいものはない。柔らかな時計は、生理学的にいえば、ダリ的 A. D. N. の巨大な分子にほかならぬ。これらの分子こそ、永遠の因子を構成するものである。それら柔らかな時計はマゾヒストである。なぜなら、それらはかくも永遠的だからだ。舌ビラメの平たい肉と同様、これらの時計の運命は、機械時代の鯨にのみこまれることにある。カマンベールのチーズ同様、これらの時計も神秘的存在である。なぜなら、聖アウグスチヌスも聖詩のなかで言っているごとく、チーズはキリストの肉体と同一視すべきものだからである」。Dali はこの絵に他日こう自ら説明を加えている。更に A. D. N. の解説に耳を傾けておく必要があろう。A. D. N. あるいはアシド・デオキシリボニュークレイック acide désoxyribonucléique。最初の間人間以来、種々の遺伝的性格の無限の多様性を維持し伝える分子。これはある意味で記憶の固執性である。生化学、細胞化学、電子顕微鏡、ビールス学、遺伝学、高分子物理学といつた、現代生物学のすべての技術的武器は、核酸の研究解明に集中的に向けられている。核酸は、ここ20年ほどの間に、身元不詳のいかかわしい状態から、生物学の第一線に躍り出たものである、と。

クレウス岬のある疲れた岩山が、>柔らかい時計<の不安な顔の姿勢にヒントを与えた、という。Dali は「なんで柔らかい時計など描くのか」という問いに、「柔らかだろうが硬かるうが、時計にとつて大切なのは、正確な時間を示すことである」と Robert Descharnes (著述家兼写真家、「Dali de gala」の著者) に奇抜な返事をしているのだが、もちろんこれで説明がついたわけではない。その説明は、ある日 Dali が大声で叫びながら彼を出迎えたとき与えられる。——「…………マゾヒストの舌ピラメが、サディストの鯨の口のなかへすりりと滑りこみやすいように、ちょうど郵便箱へ投げこまれる手紙みたいに平べつたくなるのだ！」この秘密の鍵を Dali はサイバネティックスに関する科学書のなかで発見する。電子計算器で得られた統計によると、大洋にすんでいる舌ピラメの量は、それらを食うために生きている鯨の数によつて決定され、その逆もまた真だという。

Kafka は本論稿冒頭の日記のなかで、„Das Urteil“ の分析を試み、友人は Georg 父子を結びつける共通の仲介者であると註してある。息子の友人を父が、未知から次第に自分の昵懇な味方にひきつけて怒りはじめる不合理な推移の中で、F. B. のスカートに見立てた寝衣のすそをベッドの上でめぐりあげる父の異様な仕草のなかには、狂気がかくされてあるようだ。喜劇的な父のこの動作は、Georg の、ひいては作者 Kafka の狂気への恐ろしい苦悩にみちた恐怖が反映しているのではあるまいか。時計とスカートに就いて Kafka は、何処にも何の説明も加えてはいない。が、父の死刑宣告は、当時 Felice Bauer の出現を媒介にして、Kafka の置かれていたあらゆる状況をめぐつて下されるにふさわしい自己自身への宣告——^{もろは} ^{けん} 諸刃の剣であつたといわねばならぬ。

後年 Janouch に Kafka はこの作品を「一夜の亡霊」だといきかせている。Dali に於て>大自瀆家< (1929年) が彼の最も狂気に近い作品であつたと同じ意味で、「死刑宣告」は Kafka に襲いかかろうとする一切の苦悩と生理的な悪夢のごつた煮からの乗り越えになつた。だが彼は Janouch にも語つているように、書きなぐつて、彼自身から逃げてゆき、ピリオッドのところで自分で自分をつかまえたのだが、Kafka は自分からのがれることは遂にできなかつた。(40年足らずの短い生涯だつた) 存在の袋小路を50年前先取りしていた彼は、存在の 0 地点で呻吟を重ねながら後に、長篇「審判」(Der Prozeß) の K を「一匹の犬」のように路上で又殺さなくてはならなかつたのだ。

とに角、以上考察した F. B. との危機の中で、初期の点描式文体を脱しこの作品を起点にして、Kafka はうちの鼓動を肉声で結びつけた一つながりの物語を創りに旅立ちの装いを整えるのである。その際は彼は個人的状況から、個人の自伝的要素を逆なでながら意識的に放擲して、文学的符牒に転ずる磁石を携えた——この磁石こそ „Das Urteil“ に他ならぬ。Kafka が Max Brod への遺言に於て保存すべく指定した 6 つの短篇の第 1 に、この作品を挙げたのも当然であつたといわねばならぬ。

Text

Franz Kafka: Das Urteil Fischer Bücherei, 1965.

Franz Kafka: Tagebücher Herausgegeben von
Max Brod Fischer Verlag, 1949.

Zusammenfassung

Über Kafkas „Das Urteil“

Haruo FUJIKAWA

(Fremdsprache Abteilung, Fakultät für Ingenieurkunst)

Wie Kafka selbst sagt, war „Das Urteil“ wie eine regelrechte Geburt mit Schmutz und Schleim bedeckt aus ihm herausgekommen. Durch die Novelle, die das Persönliche, das Autobiographische weit im Rücken ließ, hatte Kafka das Selbstvertrauen *nur* als Schriftsteller bekommen. Der literarische neue Stil, zu dem Kafka unter dem Zwang der Krise von 1912 durchgebrochen war, erlaubte ihm, die unheilbare Lage, in die er geraten war, auszusprechen, ohne doch sein eigenes Wissen um ihre Unheilbarkeit zu verraten.

Der Verfasser hat deshalb die kritische Verhältnis von Kafkas schriftstellerischen Standpunkt her, der schließlich auf seinen Zweifel und Ängste der Existenz beruht, betrachtet, indem er Kafkas Tagebuch zitiert: Einsamkeit war für Kafka die Vorbedingung, geradezu das Symbol seiner Existenz als Schriftsteller. Doch Ehe war für ihn zugleich auch Inbegriff des Guten Lebens. In all seiner Paradoxie stellt das Problem der Ehe für Kafka nur eine Facette eines unvergleichlich umfassenderen Problems dar.

Kafkas Enthaltbarkeit, diese Vorbedingung seiner literarischen Schöpfungskraft, und seine Suche nach dem Guten Leben als glücklicher Gatte und Vater gerieten in jener Begegnung mit *Felice Bauer* in heftigsten Konflikt. Aber während er sich selbst bezichtigte, seine literarische Zukunft durch seine Ehepläne aufs Spiel gesetzt zu haben, entdeckte er in dieser Selbstanklage unerwartete literarische Bildnerkräfte.